

〈資料紹介〉

亀井勝一郎「読書の態度と実際」(一九四二年)——翻刻と解題

赤 堀 杏 奈

はじめに

亀井勝一郎が一九四二年「昭和一七」七月、雑誌『婦人講座』に発表した「読書の態度と実際」を紹介する。

この資料は、『亀井勝一郎全集』全二巻及び補巻三(一九七一年「昭和四六」四月～一九七五年「昭和五〇」二月、講談社)に収録されておらず、また同全集補巻三に収められている書誌や年譜にも記載がない。発見する手掛かりとなったのは出口一雄による「『読書論』文献解題」(『読書論の系譜』一九九四年「平成六」二月、ゆまに書房)である。この文献解題に書誌情報が掲載されていたことよって、存在が明らかとなった。

二章構成で、内容は選書方法や読書の意義、読書に際し

ての注意等を述べた読書論となっている。

亀井と読書の関わりは深く、代表的読書論『読書に関する七つの意見』(一九五四年「昭和二九」一〇月、中央公論社)の発表前後(昭和二〇年代)に読書を取り扱った著作が特に多く見られるが、この「読書の態度と実際」は、そうした著作の中でも最初期のものにあたり、亀井にとって初めての読書論といえるのである。

〔本文〕

読書の態度と実際

亀井勝一郎

読書の態度

女性の読書が近來ほど盛んになったことは、おそらく我が歴史にも嘗て例をみないところであらう。将来それがどんな影響となつてあらはれるか私には予想出来ないが、現代女性が一つの試煉に身を投じたといふことだけはたしかである。心のひろい、情操の豊かな女性が生れるかもしれない。或ひは断片的な知識と教養を身の飾りとした鼻持ちならぬ女性があらはれるかもしれない。いづれにしても現代の女性は、精神の広範囲な領域へ足を踏みいれてしまつたのである。この試煉をいかに切り抜けるか、たゞ読書に限らず、ひろく求道の問題としてこれは将来の文化を考へる折、大切な要素となるであらう。

読書の方法

ところで読書の方法であるが、我何を読むべきかといふ問題は、直ちに我いかに生くべきかといふ問題につながる。迷ひがあればこそ、それを解決しようとして我々は聖

賢の教を聞くのである。したがつて、本を読む以前に、まづ自分の胸に問うて、何がいまの自分の悩みであるかを明察しなければならぬ。単なる興味や好事癖だけではもとより不充分である。しかもさういふ悩みは、他人から教へらるるまでもなく自覚するのがほんたうであるから、読書もまた自ら求めるものでなくてはならない。自分の読むべき本をひたすら他人からのみきくといふ態度は、自分の生き方を他人からのみ教はらうとするのと同様で結局空しい返答を得るにすぎないであらう。拱手してゐれば誰か導いてくれると思つたら間違ひである。己の生存は己自ら苦勞して求めねばならぬ。この求むることの深さと激しさを根幹として、然る後多くの言説に耳を傾けるべきであらう。

濫読の効用

實際の問題としてみれば、我々が何か精神上の疑惑を抱いた時、いきなりそれに明答を与へてくれるやうな本にぶつかるとは稀である。あちこちの様々の本を読み漁り、疑惑はいよいよ深くなると云つた場合は尠くない。これを乱読の弊として戒める人もある。だが、濫読は決してわるいことではない。どんな人間でもはじめは濫読するものな

のである。即ちそのことは、その人の迷ひが多いことを意味する。未だ自己の考への定らぬことを意味する。迷ひ多く考への定らぬのは、一見わるいやうにみえるけれど、事實は彼の生命力が成長しつゝあることを示す証拠なのだ。若し我々が早くから迷ひもなく、定見があつて、決つた本だけを読んでゐたとしたらどうであらうか。却て人生から遊離してしまふであらう。我々の人生が、そんなにも早く悟りや定見をもたらずものとは思へない。

むしろ我々の心がひろく精神が勁ければつよいほど、人生は一層多くの謎を語るであらう。況や若い人にとつて、この世の一切は未聞の秘密に属する。自分はいまだ形成しきれない混沌のいのちである。迷ふのは当然なのだ。迷ふ以上は、読書において濫読するのも当然なのだ。むしろそのためには少なからぬ時間の浪費もあるだらうし、悪しき影響もつけるには相違ない。しかし廻り道や悪しき影響を回避して、この実人生を過さうなどと思ふのは虫のよすぎることで、肝心なのは、何事であれ恐るるところなくこれを味つてみることだ。それが勇氣といふものだ。濫読を悔いる必要はない。むしろ迷ひの少きを悔いる方がほんたうなのではなからうか。濫読によつて、我々は些末な知識の断片を身の飾りとし、デイレツタントたる危険も多いのだ

が、さういふ危険を犯してまで、つまり自分に納得の行く本に立会ふまで、求めて行くべきだと思ふ。その点、読書も人生に処する態度も同じである。

愛する心

次に、さういふ迷ひのなから、やがて自分の愛読書が発見出来るやうになると悦びは大きい。愛する——これが読書においても第一の条件だ。結婚にたとへると、様々の本の間を迷ふのは、ちようど誰を自分の伴侶として選ぶべきかに迷ふやうなもので、つまり精神の未来の良人を求めてゐるにひとしい。その時、第三者のすゝめた本のみに頼るのは、仲人に一切を委ねて自分は拱手してゐるやうなもので危険である。自ら愛することを知ること、愛によつて精神の未来の良人とむすびつかなければならぬ。むしろその結果が果していゝか悪いかわからない。仮に悪いとしても、愛したといふその事實は限りなく美しいことではないか。たとへ立派な精神の良人であつても、他人からすゝめられたものは結局身につかないであらう。自分で選ぶ、仮に失敗しても責任を負ふ覚悟で愛する——これが読書においても一番大事な点だと思ふ。

ところで、自分がせつかく選んでも、それを理解しつく

すことはまた容易ではない。いい本ほどさうである。或る利那は夢中になつて愛しても、どこかに不可解な点があつたり手のとどかぬところもあつたりして、迷ひが更に倍加する場合もあらう。さういふときは静かに本を伏せて、時を待つがよいのだ。二十代でわからなかつたことも、三十代になつて漸く理解出来たと思ふ機会もあらうし、更にもつと年をとつてから、やつと思ひあたつたといふ場合もあらう。さうして終生求めて行けば行くほどその深い奥をのぞかせてくれるやうな本があるとすれば、それこそ理想の結婚といへるのではなからうか。或る本に接して、いきなり全部を理解しようとするのは間違ひであり、そんなことは不可能なのだ。数百頁の本のなかで、たつた一句だけしかわからなかつた場合は、その一句を中心にしまつておいて、他に全部忘れてしまつても差支ない。忘れようとしても忘れられぬ一句だけが、畢竟自分の血肉となるであらう。またその一句によつて人生に対する眼も開かれるであらう。愛するからと云つてやたらに貪つてはならぬ。甘へてはならぬ。

求道の志

読書の根本には求道の志がなければならぬが、しかし

求道者の態度には、稍々もすれば堅くるしいものがありがちだ。あまりに神経質に考へたり、小心翼翼としてもの事に対したり、また緊張しすぎたりして、却て対象の姿を見失ふ場合がある。読書においても、求道の志は必ずずなければならないが、それはゆつたりと落着いたのび／＼したものでなくてはなるまい。堅くるしい心に、決して真理は忍び寄らない。或る本が稀有の名著であつたり、また重厚な古典である場合、端座してこれに接するのはいい、ことだ。しかし、そこに絶えず心の悦びがなければならぬ。名著である故に、また世間一般に通用してゐる故に、自分で面白く思はなくとも無理に苦勞して読まうとする人がある。さういふ無理は試験勉強のやうなもので、決して我々の心を豊かにはしないだらう。求道は無理を強いることではない。さうなるとすべてが形式化されて、味気ないものになつてしまふ。儒教などの影響の深い我が国では読書にまでこの種の堅くるしさがつきまゝとつてゐる。自分の愛読書は、好きで好きでたまらぬといつたやうなものであるから、のび／＼と楽しまなくてはならぬ筈である。たとへ名著といはる本でも、読んでみて興味を起こさぬときは見放すがいい。またいつかの機会に興味が湧くかもしれないのだから。

古典

現在の読書範囲——芸術や思想の分野に限つていへば、およそ三つにわかれると思ふ。即ち古典と現代文学（思想）と外国文学（思想）である。とくに近來は古典の復活が盛んであるから、この方面では実に多くの解説や注釈が出てゐる。さういふものがなければ容易に理解できぬのもほんたうだ。しかし、古典に接する際、我々の屢々おちいる危険は、さういふ注釈や解説の類にひきずり廻されて、結局自分もたゞ字句や事実の穿鑿に終始してしまふことだ。後代人の附加した様々の夾雜物から自由になつて、自分の眼でぢかに在りのまゝの古典の姿にふれる——これは容易ではないが、しかし古典を読む折の最も大切な心掛けであらう。古典にもよるけれど、たとへば万葉集など、必ずしも注釈の必要な本ではない。その時々と思ひのまゝにこれを味つてみて少しも差支へないのであらう。古典だからと云つて勿体をつける必要はない。殊更に嚴めしい説教と化す必要もない。つまりは自分にとつて懐かしいものとする——これが最も肝要だ。懐かしいといふ感じを伴はなくては、いかなる古典も無意味となるであらう。單なる時局的

觀念や教訓癖によつて左右されることほど愚かなことはない。自發的な愛情——ここでもこれが第一に大切なのである。

また古典を読む人の中には、さういふ努力を積んでゐるうちに、何となく偉くなつたやうな氣になつて行く人が尠くない。古典は尊く美しい。その尊く美しいものに絶えずふれて行く自分もまたいつしか尊く美しい——つまりうぬほれである。人間の虚栄心は果のないものであつて、読書にも屢々これがつきまとふ。殊に古典を読みつゝ、他人を蔑視する風が起り易い。しかし、古典に接するからと云つて、自分も何となく偉くなつたやうな氣になるのは我々の妄想であらう。古典はすがりつくべきものではない。それは頼つてさへゐれば大丈夫と云つたやうなものではない。つまり自分の精神の弱さを、古典の威によつてゴマ化してはならぬと私は言ひたいのである。古典の教は、それを深めれば深めるほど峻厳であつて、畢竟汝自身の道を往けといふ追放の言葉にみちてゐるものだ。云はば我々を更に試煉に遭はせるやうな烈々たる心を宿してゐるものだ。それを感受し、ます／＼畏れるやうになるのがほんたうであらう。古典を読むことによつて現実の己に盲目になつてはならぬ。

現代文学

ここで現代文学（思想）に接することが大切になる。成るほど現代のたとへば小説には、つまらない作品が多いかもしれない。また古典に比すれば現代思想は未成品にすぎないのも事実である。だが、さう云つたからとてこれを輕視してはならぬ。何故なら、どんなにつまらなく猥雑であつても未成であつても。我々自身がその中に生き、そのひとりとして現代を背負つてゐるからだ。前にも述べたやうに、時代の一切の悪や疾病から逃れようとするなら、我々は山へでもひつこむ以外になからう。さうして精神の健康を保つことも出来る。しかし、眞の健康は、たとへ猥雑な空氣を吸ひ、つまらぬ環境に在つても、それに抵抗し克服せんとするところに成立つ。読書においても同様なのだ。現代から逃れてはならぬ。困難は現代そのものの裡にある。いまの文学や思想の善さも悪さも未熟さも、思ふ存分味つたらいゝのだ。我々の精神を育てる肥料は古典のみではない。時には腐敗したものさへ心の糧となるのだ。つまりそれをよくみつめ、さういふものの發生した理由を考へ、これに抵抗する力を養ふ、云はば心の訓練となるのである。この態度は読書のみならず、人生万般に通ずるであらう。

翻訳文学

次に外国文学（思想）の翻訳について一言しておきたい。翻訳はいまなほ甚だ盛んであつて、一読して大へん面白い作品も尠くない。だが、翻訳とは何か——その限界をのみこんで読書しなければならぬ。たとへばわが歌や俳句を英文や独文に訳するのが殆んど不可能のやうに、外国の言葉を日本語にうつすのも不可能なのだ。伝統風俗習慣の差異のみならず、一語一語の感じや陰影や音調が悉く違ふ。それをもしも日本語にうつすことは出来ない相談である。厳密にいへば、翻訳はむしろ翻案乃至は一種の創作と云つていい。それだけを読んで外国の文学や思想にふれたと思ふのは間ちがひであらう。つまり我々が今まで享けた西洋思想とは恐ろしく觀念的なものだつた。觀念の無拘束な横行が今日の思想的混乱の重要な一因だつたと云つてもよからう。我々は明治開国以来、西洋にあこがれてゐたのだが、このロマンチックな夢がどれほど我々を困憊させたか。夢をもつことは美しいに相違ないが、それが次第に頽廢性を帯び悪夢と化したのだ。西洋の伝統・風習・言語が少しも身につかぬままに、その幻影だけを知り、片言隻句を覚えて西洋を語つてゐたわけである。

かやうな觀念性を絶えず警戒してかゝることが、翻訳文

学を読むとき大切なものではなからうか。

翻訳をとほしてさへ、むしろ美しいものは美しくみえる。つまり翻訳といふヴェールをとほして我々は外国の姿をみてゐるわけなのだ。うつかり空想的になつてはならぬ。盲目的になつてはならぬ。我々はこゝでこそ常に明確な認識と想像力をはたらかせなくてはならない。尤も翻訳を一切読まぬといふなら別問題である。西洋一切を否定し、さることも出来よう。だが、さうなると、前とは別の意味で我々は観念的になつてしまふ。つまり現代日本精神の混乱状態に盲目になつてしまふ。盲目になることはそれから逃避することだ。我々としては西洋文明の害毒をよく見究め、これへの抵抗素を体内に確保する必要があるのだ。

翻訳といふ甚だ不具のすがたで伝つて来たものに対して、我々は出来るかぎり実体を推察し、正確に判断して、それと日本固有の心とを比較し、取捨選択するだけの叡智を養はねばならない。外国文学を読むことは、かういふ戦ひを試みることである。拙劣な模倣ほど滑稽なものはない。ちようど嘗てアメリカ映画の盛んだつた頃、わが日本女性が、俳優の身振りや化粧の方法を真似たのと同じやうなことが、翻訳の読書の折にも起り易いのである。

〈解題〉

亀井勝一郎の「読書の態度と実際」は、一九四二年「昭和一七」七月、社会教育協会が発行する『婦人講座』（第一四八篇）に発表された。

『亀井勝一郎全集第二巻』に収録された昭和一七年当時の亀井のノートを参照すると、発表予定リストと思われる記述があり、「六月 女性と読書」「社会教育」と記されている。この「社会教育」というのは、雑誌『婦人講座』の発行元である「財団法人社会教育協会」の略で、「六月」は原稿の締め切りを指していると推測出来る。「女性と読書」は、当初のタイトルもしくは『婦人講座』の編集者から与えられたテーマと考えられ、後に「読書の態度と実際」として掲載されたと思われる。

こうした記録がノートに残されているものの、「読書の態度と実際」は『亀井勝一郎全集』全二巻及び補巻三（一九七一年「昭和四六」四月～一九七五年「昭和五〇」二月、講談社）に収録されておらず、また、同全集補巻三に収められている書誌や神谷忠孝による年譜にも記載がない。亀井の全集未収録の著作は、読書に関わるものだけでなく、

・「戦争と宗教」（『新女苑』一九四一年「昭和一六」七

月)

・「読書入門」(『婦人画報』一九五一年「昭和二六」一一月)

・「読書について」(角川書店編『日本の名著』一九五六年「昭和三二」五月、角川書店)

・「現代における読書の意義とその問題点」(『読書科学』一九五八年「昭和三三」七月)

などが挙げられるが、これらは全て補巻三の書誌や年譜には書誌情報や発表年月の記載がある著作である。今回紹介する「読書の態度と実際」は、全集刊行の時点では存在が確認出来ず埋没してしまった著作と言えるだろう。

さて、この「読書の態度と実際」を発見するに至ったのは、出口一雄の「『読書論』文献解題」(『読書論の系譜』一九九四年「平成六」二月、ゆまに書房)に依るところが大きい。「読書の態度と実際」は、九章の「昭和年代(戦前)の読書論」で取り上げられており、書誌情報に加えて、「婦人読者に対して、読書の態度とその実際的な方法を説いたもの」という概略が付されている。

実際に内容を見てみると、B6版で一三頁、「読書の態度」と「読書の実際」の二章構成となっている。「読書の態度」は主に、選書の方法や読書の意義を述べており、「読書

の実際」は古典文学・現代文学・翻訳文学のそれぞれを読む際の注意を挙げている。

ここで、「読書の態度と実際」が掲載された『婦人講座』について触れておこう。「読書の態度と実際」が掲載された年の『出版年鑑(昭和十八年版)』の「内地雑誌目録」を参照してみると、『婦人講座』には⑤のマークが付されている。これは、「官庁外郭団体雑誌」を著すマークで、出版元の社会教育協会のパンフレットには、一九二五年「大正一四」十一月一日に文部大臣から財団法人設立の認可が下り設立された団体である旨が記されていた。

『婦人講座』自体の創刊は一九三〇年「昭和五」四月である。創刊した年の九月に刊行された第六篇を見ると、今澤慈海が「家庭と読書」というタイトルで執筆しており、一号に対し一人が執筆、頁数は五〇頁に満たない程度であった。扱う内容は多岐に亘り、国立国会図書館に所蔵があるものを見渡しただけでも、「婦人の犯罪」「栄養に関する用語」「恋愛と結婚」「公民の意義」「夏の台所衛生」など、範囲は広い。

亀井が「読書の態度と実際」を執筆した第一四八篇も形態は変わっておらず、B6版で全頁数は四八頁となっている。表紙にも「読書の態度と実際 亀井勝一郎」とあり、

創刊当時と変わらず一号につき一人の執筆者であるかのように見える。しかし、目次を見てみると、巻頭に亀井の「読書の態度と実際」が配されているが、他にも今井邦子「万葉のはじめ」、古谷綱武「生活の工夫（働く婦人における）」、窪川稲子「敵空に飛ぶ（愛誦文）」、アラスカ半島の近くのアリユーシャン列島とダッチハーバーについて紹介している「北の新戦場」という記事が並んでいる。

また、亀井の記事のすぐ後には「文部省発表・婦人の教養書」という「母の教養図書目録」なるものが付されており、亀井の記事はこのような推薦図書の発表を踏まえて要請されたものであるように推測出来る。参考までに図書目録の緒言を引用する。

文部省社会教育局から母の教養図書目録が発表されました。これは数多い新刊図書中から都市と農村とに別けて十円程度、三十円程度で買ひ^マそこへることが出来、これによつて、たとへ十円でも一通りまとまつた現代主婦たる教養が得られるやうに選択されたものです。主婦の読書指標としてばかりでなく、隣組や部落会の回覧図書を備へつけるにもよき参考であると思ひます。〔主婦の教養書 都市と農村に分け文部省が選ぶ〕

この『婦人講座』第一四八篇が刊行された七月のおよそ一か月前の『読売新聞』朝刊には、右に引用した緒言とほぼ同内容の文章が付された目録が「次代の皇国民を育てる母の教養書 文部省が選んだ読書指標」（一九四二年「昭和一七」六月八日）という見出しで掲載されている。このようなタイミングもあつて、文部省社会教育局にとってこの『婦人講座』七月号は、「母の教養図書目録」普及のための特集号であることは想像に難くない。そうした思惑は、編集後記を見ても一目瞭然である。

母としての教養の重大さに鑑み文部省ではこのほど婦人の教養図書を選定してこれを発表いたしました。本号にもその概要を紹介いたしました。図書の氾濫時代に「何をどう読むべきか」についてその選択の具体的標準を示されたことは誠に喜ばしいことです。

これで何をどう読むべきかの「何を」については大体の方向を与へられましたが、更に「どう読むべきか」の大切なことが残されてゐるやうです。本号はこの問題に答へる所が多いと思ひます。正しい理解の下に大東亜の母として教養に努めませう。〔編集室から〕

る。

このように、推薦図書目録の発表は「図書の氾濫時代に「何をどう読むべきか」についてその選択の具体的標準を示されたことは誠に喜ばしい」と称賛している一方、巻頭を飾った亀井の記事については殆ど触れていない。かろうじて亀井の記事に対する言及なのだろうと推測できる部分では「更に「どう読むべきか」の大切なことが残されてゐるやうです。本号はこの問題に答へる所が多いと思ひます」という奥歯に物が挟まったような書き方をされている。こうした部分から、この号において亀井の記事が二の次であるのが分かるばかりでなく、編集部の意図と亀井の書いた記事には多少なりとも食い違いがあったことを窺わせる。

その齟齬が特に表れているのが、自分の読むべき本は「自ら求めるものでなくてはならない」と述べている部分である。亀井は次のように主張する。

「……」読書もまた自ら求めるものでなくてはならない。自分の読むべき本をひたすら他人からのみきくといふ態度は、自分の生き方を他人からのみ教はらうとするのと同様で結局空しい返答を得るにすぎないであらう。拱手してゐれば誰かゝ導いてくれると思つたら間違ひであ

この部分の亀井の論調は、その後の「求道の志」の節で読書は「のび／＼と楽しまなくてはならぬ」と述べている部分等と比べて、かなり厳しい。それだけ「自分の読むべき本をひたすら他人からのみきくといふ態度」を戒めているのが見て取れる。また、「愛する心」の節では「他人からすゝめられたものは結局身につかないであらう」と述べ、「自分で選ぶ」ことが読書において「一番大事な点」であると強調している。つまり、亀井の読書論に則れば、他者から薦められた本は「身につかない」と切り捨てられてしまっている。こうした亀井の主張は、皮肉にもこの記事の後に付される文部省の推薦図書目録をまるで否定するかのような形になってしまっているのである。

また、亀井が〈読書〉を論じる際に想定している本と、文部省推薦図書の顔ぶれにも決定的な違いがある。「読書の実際」の章の冒頭で亀井は、「現在の読書範囲」を古典と現代文学と外国文学の三つに分けているが、「母の教養図書目録」で挙げられている本は全ていわゆる実用書である。試しに「十円程度のもの」で「都市農村共通」として挙げられているものを左に引用してみよう。

- ▽神社読本（全国神職会編）
- ▽礼法要項（文部省制定）
- ▽昭和国民読本（徳富猪一郎）
- ▽家事家計篇（羽仁もと子）
- ▽栄養の科学（井上兼雄）
- ▽主婦の教養（浅香ゆき）
- ▽愛育のころ（愛育会編）
- ▽国民学校と家庭教育（坂本^{マツ}一郎）
- ▽結婚訓（穂積重遠）

こうして推薦図書タイトルを並べてみただけでも、亀井が「読書の態度と実際」で論じている内容と大きな隔たりがあるのは明らかであろう。

このように『婦人講座』第一四八篇は、文部省推薦図書の宣伝目的で編まれた号でありながら、読むべき本を他人から推薦してもらうのはよくないと論じている亀井の読書論が巻頭を飾る、矛盾を抱えた号になってしまっているのである。

最後に、この「読書の態度と実際」が発表された当時の亀井と〈女性〉と〈読書〉の関わりについて触れておきたい。

解題の冒頭にも示したように、「読書の態度と実際」は一九四二年「昭和一七」七月に発表された。この当時亀井は、雑誌『新女苑』の書評欄である「読書の頁」の連載を担当していた。こうした欄を担当することに対し亀井は、「女性のための読書案内といった仕事は、私としてははじめての経験」と述懐している（「読者への手紙（読書の頁）」『新女苑』一九四二年「昭和一七」一月）。その期間は一年半（一九四一―四二年の半ば）に亘り、一九四二年「昭和一七」六月の「西洋文明の悲劇」をもって亀井は連載を降りている（後任は中野好夫）。これは、一九三九年「昭和一四」三月から一九四四年「昭和一九」五月まで続いた「読書の頁」の歴代執筆者の中で一番期間が長い。

そして担当を降りたその三ヶ月後である九月に、「読書の頁」（全一八回）の連載のうち一〇篇を「読書求道」としてまとめ、『日本の女神』に収録した。つまり、この「読書の態度と実際」が『婦人講座』に発表された時期というのは、亀井が「読書の頁」の担当を外れた時期と重なり、また『女性と読書』というテーマに関わりが深かった時期といえるのである。

先程、「女性のための読書案内」はこの『新女苑』「読書の頁」が初めてだという亀井の述懐を紹介したが、では具

体的にどのような「読書案内」が行われていたのか。それは、先にも書いたが書評の役割を多く担ったものであった。例えば、第一回目では林房雄の「西郷隆盛」と斉藤史の歌集「魚歌」、第二回目は武者小路実篤の「幸福な家族」、島崎藤村の「力餅」、田中秀光の「オリムポスの果実」といった具合で、一回につき数冊紹介する形をとる。また、新刊や良書の紹介のみならず、亀井が関心を寄せている分野（例えば古美術等）の専門書の紹介など、取り上げる範囲は幅広い。また、こうしたブックレビューが占める割合に比べるとかなり少ないが、読書論にも触れている。

この「読書の頁」で少々触れられていた読書論的内容は、第一回目と連載開始一周年の第二三回目に「読書の心構へ」として読書法が紹介されている部分に見られる。試みに、『新女苑』『読書の頁』に紹介された「読書の心構へ」の一部と、「読書の態度と実際」を比較してみよう。

読書案内をはじめた第一回目、つまり昭和十六年の新年号に、読書の心構へについて私はおおよそ次のやうな意味のことを述べておいた。

日々たくさん本が出るが、一体かういふ時期に何を讀んだらいゝのかと、時折私は質問をうける。しか

し自分の読むべき本を他人に尋ねるといふことは、真実をいへばをかしいことなのだ。何故なら、我何を讀むべきかは、直ちに我いかに生くべきかに通ずるからである。一個の人間の生き方など、所詮は自分で求める以外にはないからである。おそらくそのため人々は苦勞も仕様々迷ふでもあらう。さういふ苦勞や迷ひの中から、やがて自分の愛読書が生れ、生き方も次第に明らかになつてくるのである。〔読者への手紙（読書の頁）（『新女苑』一九四二年「昭和十七」一月）

ところで読書の方法であるが、我何を讀むべきかといふ問題は、直ちに我いかに生くべきかといふ問題につながる。迷ひがあればこそ、それを解決しようとして我々は聖賢の教を聞くのである。したがつて、本を讀む以前に、まづ自分の胸に問うて、何がいまの自分の悩みであるかを明察しなければならぬ。単なる興味や好事癖だけではもとより不充分である。しかもさういふ悩みは、他人から教へらるるまでもなく自覺するのがほんたうであるから、読書もまた自ら求めるものでなくてはならない。〔…〕

次に、さういふ迷ひのなかから、やがて自分の愛読

書が発見出来るやうになると喜びは大きい。愛する

——これが読書においても第一の条件だ。〔「読書の態度と実際」(『婦人講座』一九四二年「昭和一七」七月)〕

こうして並べただけでも、「我何を読むべきか」＝「我いかに生くべきか」、自発性の強調、「迷ひ」の中から愛読書は発見されるという濫読の肯定など、その主張はほぼ同じであることがよく分かる。つまり、『新女苑』『読書の頁』で断片的に触れていた読書論的内容を集約し、発展させたのがこの「読書の態度と実際」であり、亀井にとって最初の体系立った読書論といえるのである。

こうした、初期にみられた主張は、戦後になっても引き続き亀井読書論の柱として残っている。一九五〇年「昭和二五」一〇月二七日の『新潟日報』に発表された小文「読書七則」には、「一、読書の第一歩は求道の志を立てることにある。われいかに生くべきかといふ根本の問ひである」といった記述が見られるし、高校生に向けて書かれた『文学の読み方』(一九五二年「昭和二七」一月、至文堂)の第一章で「読書の法」を説く際も、「たとひどんな名作であっても、他人から推薦されてもらったものよりも、自分で迷ひながら発見し出会ったものの方が尊いのは当然である」

と述べており、「読書の態度と実際」で主張していた内容と重なる部分が多い。

また、亀井の代表的読書論『読書に関する七つの意見』(一九五四年「昭和二九」一〇月、中央公論社)においても、「我何を読むべきか」＝「我いかに生くべきか」という問題意識は発展した形で受け継がれている。第三章「自分の原典を発見すること」の冒頭で「読書の目的は、一人間としての精神形成のためであることは云ふまでもない」と述べており、読書経験と人生経験は表裏一体の関係にあることを強調している。

このように、「読書の態度と実際」は、戦後数多く著された亀井による読書論の嚆矢と言えるのである。

〈附記〉

引用文の旧字は新字に改め、ルビは省略した。その他の表記、仮名遣い、また誤植と思われる箇所も原文のまま掲出した。

(立教大学大学院博士後期課程)